にしてもよかうが、こんなどちらともつかぬものがある事を知つておく必要があらう。

＊　＊　＊　＊

次に前號及び本號にかいたのを簡單にすると次の樣になる。

飛鳥時代に於ける唐居敷の有無は未詳であるが、奈良以降出入口の柱下に用ひられたものであつて、石製と木製とあつた。其平面は殆んど總て長方形であるが、稀に除外例として圓形或は其他特殊の形をしたのもあつた。時に或は多くの裝飾的彫刻をした別種の石を加へた美事なのもあるが、これは支那の直寫――支那製――であつて思はれる。日本式のにかゝる手の込んだものは見當らない。石製のには稀に藁座を一石より刻みだしたのもある。

（昭和三年八月三十一日稿了）

紹介

●日本史學史　文學博士　清原　貞雄著

我國に於て經つた史學史の出現は本書を以て嚆矢とする、史學それ自體が既に一箇の史的現象なる以上その發展を研究對象とする史學史の成立すべきは勿論である、殊に我國は千年に餘りてこの學の歷史を有するのであるが從來これに關する著作の甚だ乏しかつたのは寧ろ不思議といはねばならぬ。されば本書の出現は誠に空谷の跫音にも比すべきものであらう。全篇五章、朝廷の國史編纂、平安朝時代に於ける私撰の歷史、鎌倉時代、南北朝足利時代、德川時代がそれであり各章共に一々の史書を中心としてそれらの編纂の由來、體裁內容並に思想を說き背景としての時代思想をも隨時にとり入れてゐる。史學史の構造については種々議論多きところであつて本書の如きもなほ滿さるべき多くの要求をその中に含んで居ると思はれるがこれによつて我國に於ける史學發達の過

程を概觀し得又一種の書史として見ることも出來る。卷末二十頁の索引もその辭書的效果を助くる事が少くない。（菊判三三三頁　東京中文館書店發行　定價三、〇〇）

●明治維新神佛分離史料續篇上卷　村上專精　辻善之助　尾鷲順敬　共編

先に出版せられた上中下三卷のいはゞ正篇に引續いてこゝに續篇の上卷が世上に送られた。編纂の體裁は正篇に同じく地方別に史料を配列し所々に圖版を挿入してゐる。內容の主なるものには東京淺草寺常陸筑波神社、讃岐琴平神社、豐前宇佐八幡宮等の神佛分離史料、信濃松本藩廢寺の件石見濱田領內神職神葬祭願一件、白峰寺廢寺並復興始末、香椎宮に於ける神官と社僧の軋轢、二荒山神社並東照宮及滿願寺處分の件、鹿兒島藩廢寺廢佛並に復興史料等がある。

本書も亦維新改革に從つて起つた種々なる社會相をそこに歷々指摘し得るものがあり興味一方ならざるを覺える。續篇は上下二卷を以て完成する筈である。（菊判一、一四二頁、圖版十葉、東京東方書院發行、定價下卷共二四、〇〇）〔以上肥後〕

●春日神社文書　春日神社々務所

春日神社は古來藤原氏との由緣深く、從つて國史と少からざる關係を有し、而も傳藏する貴重なる古文書の豐富なる點は本邦神社中の一二に位するものである。此度京都帝國大學助教授中村直勝氏編纂の下にこれ等が公刊されることゝなつたのは學界の爲め歡喜に堪えぬ事である。

本書は資料として、本社が名にし負ふ大社であり且つ神領が諸國に存在して居つたから、政治、經濟、社會、其他諸方面に多大の關係を有し、特に本社關係の關所料海陸交通の發達、社寺領制度、神木動座等の史料は夥しく含まれて居つて、啻に神祇史、古文書學上に於てのみならず廣く國史の研究上、貴重な資料を提供する。その編纂方法には最も意を用ひて、各文書に料紙名及び形狀を注し、別に人名地名件名等の詳細なる索引を附してある等從來の此種のものよりも數歩を進めたものである。本書は古文書の第一卷で、之より順次古文書古記錄が公刊されるとのことであるが、吾人は其の完成の速かなら